

## 資料

高校生と大学生のソーシャル・サポート  
—発達の差異の考察—福岡 欣 治<sup>\*1</sup>

## 1. 緒言

生活の中で様々な問題に直面したとき、自らの支えとなる関係をもちうるかどうかは、個人が心身の健康を維持していく上で、重要な意味をもつ。ソーシャル・サポート研究は従来からこのことを指摘してきた<sup>1)</sup>。ソーシャル・サポートは、他者から得られる有形・無形の援助<sup>2)</sup>、社会的ネットワークの中でやりとりされる資源の一つ<sup>3)</sup>などのように様々な概念化がなされているが、その根幹にあるのは、Caplan<sup>4)</sup>の指摘にみられるような、家族や友人など、専門家ではない一般の人々の人間関係 (lay resources) が心身の健康に対して有する支援的性質にあると考えられる。

ところで、こうした支援的な人間関係は、人の生涯を通じてその内容を変化させていく<sup>5)</sup>。エリクソンの心理社会的発達理論<sup>6)</sup>に端的に示されているように人生のそれぞれの時点で重要な人間関係があるが、特に青年期は、自律の欲求が高まり親からの心理的な自立が促されるとともに、友人との間でより深い関係性を築いていくことが求められる時期である<sup>7)</sup>。なお、青年期における親からの自立とは、親への依存を完全になくするという意味ではなく、それ以前からの結びつきをふまえつつ独立性とのバランスをとることであり<sup>8)</sup>、親密さを維持しながら、一方的な依存でなく相互的な関係へと移行していくことである<sup>9)</sup>。

しかし、ソーシャル・サポートの観点からこうした青年期の心理社会的な発達的特徴に着目した研究はそれほど多くはない。特に青年期の後期に相当する高校生から大学生にかけての変化を扱った研究が少ない現状にある。日本での研究としては嶋田<sup>10)</sup>や尾見<sup>11)</sup>などが知られているが、尾見<sup>11)</sup>の研究は小・中・高校生までを対象としており、論題のとおり「子

どもの」ソーシャル・サポートに焦点を当てている。嶋田<sup>10)</sup>は中・高・大学生を対象としているものの、サポート期待のもつストレス反応軽減効果に主眼をおいており、さまざまなサポート源から得られるサポートの量的な変化については統計的に検討していない。また、ソーシャル・サポートの測定方法にはサポートの利用可能性 (知覚されたサポート)、実際のサポート授受 (実行されたサポート)、サポートがやりとりされる対人関係の存在 (サポート・ネットワーク) など様々なものがあるが<sup>12)</sup>、嶋田<sup>10)</sup>のように知覚されたサポートのみを扱っているか、あるいは尾見<sup>11)</sup>のようにサポート・ネットワークに関する指標 (どのような人が頼りになる人 (サポート源) として挙げられるか) のみが用いられており、それらの相互関係も含めた検討はおこなわれていない。

以上の問題意識をふまえ、本研究では高校生と大学生におけるサポート・ネットワークの特徴およびそれらと知覚されたサポートとの相互関係に着目する。具体的には、福岡と橋本<sup>13)</sup>が提案しているサポート・ネットワークの広さと深さを反映すると考えられる構造的指標、およびサポートの入手可能性と満足度に関する指標を用いて、高校生と大学生におけるソーシャル・サポートの特徴を比較し、精神的健康との関連も含め高校生と大学生の発達の差異について検討することを目的とする。なお、福岡・橋本<sup>13)</sup>は大学生と既婚中年成人を対象とした調査で、後者では配偶者を中心とするサポート・ネットワークを持つのに対して、大学生ではこれが非血縁者に広がっていることを報告している。このような相違は回答者のおかれている社会的文脈によって生じると考えられるが、すでに述べた青年期における親子関係および友人関係の変化は、前者が血縁者の、後者が非血縁者のサポート・ネットワークに反映され

<sup>\*1</sup> 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先) 福岡欣治 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail : [fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp)

るはずである。本研究は小規模な横断的研究ではあるものの、これら複数の指標を用いることで、青年期後期に位置づけられる高校生と大学生のソーシャル・サポートの特徴について、資料的な情報を提供することを目指す。

## 2. 方法

### 2.1 被調査者

高校生168名（男子84名、女子84名）と大学生162名（男子82名、女子80名）を被調査者とした。高校生は1～3年生で平均年齢は16.63歳（SD=0.88）、大学生は1・2年生が中心で平均年齢は19.04歳（SD=0.93）であった。なお、高校生は全て自宅通学であり、大学生は男女いずれも自宅、自宅外がほぼ同数であった。

### 2.2 測定内容

本調査には複数の内容が含まれていたが、本研究の分析に使用した変数は以下のとおりである。

#### 2.2.1 ソーシャル・サポートの入手可能性

福岡と橋本<sup>14,15)</sup>で用いられたソーシャル・サポートの測定項目より、回答者の負担を考慮して可能な限り少数の項目で多面的な内容を含むように計6項目（表1 参照）を抜粋した。そして、各サポートを周囲の人達が自分に対してしてくれると思うかどうかを4段階（1. してくれないと思う、2. どちらかといえば、してくれないと思う、3. どちらかといえば、してくれると思う、4. してくれると思う）で評定させた。6項目の合計点を「入手可能性」の指標とした（以下では「サポートの入手可能性」と表記する）。Cronbach の  $\alpha$  係数は0.80であった。

#### 2.2.2 ソーシャル・サポートの提供者（サポート源）

ソーシャル・サポートの入手可能性についてたずねたのと同じ6項目の文末を「・・・してくれそうな人は誰ですか」に改めた上で、Sarason et al.<sup>16)</sup>の尺度およびその日本語訳<sup>17)</sup>に準じた形式で、自分自身にとっての具体的なサポート源をそれぞれ7名ま

で間柄（母、妹など家族や親戚の場合）ないしはイニシャル（友人など家族や親戚以外の場合）で挙げてもらった。なお、同じ間柄で別の人を挙げるときは、それぞれ区別できるよう番号を付けてもらうようにした。指標化にあたっては、福岡・橋本<sup>13)</sup>に従い、特定の人がいくつの項目で挙げられたか、また、6つの項目を通じて正味で（同一人物が複数回挙げられた場合を一人と数えて）何人の人が挙げられたかを集計した。そして、前者についてのもっとも大きな数値を「リスト最大値」、後者を「実質人数」とした。リスト最大値が大きいことは多面的な結びつきをもつサポート源が存在することを、実質人数の値が大きいことはサポート源が拡がりを持っていること（ネットワークの広さ）を反映する指標である（以下ではこれらを総称する場合に「サポート源の人数」、それぞれについては適宜「リスト最大値」「実質人数」と表記する）。なお、これらの指標については通常の意味での信頼性係数を算出できないが、各項目で挙げられた人数のみで計算した場合のCronbach の  $\alpha$  係数は0.71であった。

#### 2.2.3 サポート源との関係に対する満足度

サポート源を挙げてもらう質問に続けて、そのようなサポートを提供してくれると思う人々との関係についての満足度（もしも該当者がいない場合には、そのことに対する不満の程度）を、それぞれ7段階（1. とても不満、2. かなり不満、3. 少し不満、4. どちらともいえない、5. 少し満足、6. かなり満足、7. とても満足）で回答するように求めた。6項目の合計点を「満足度」の指標とした（以下では「サポート源への満足度」と表記する）。Cronbach の  $\alpha$  係数は0.77であった。

#### 2.2.4 精神的な不健康

日本語版 General Health Questionnaire<sup>18)</sup>より、12項目版に該当する項目を抜粋して使用した。「何かをするとき、いつもより集中して」のような項目からなり、選択肢の文言を続けることで文が完成するように構成されている。選択肢は項目によって若

表1 ソーシャル・サポートの項目内容

- 
- |   |
|---|
| 1) 私がやっかない問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、私の気をまぎらわせる                     |
| 2) 私が精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる  |
| 3) 私が急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき（例えば家賃や学費の支払い、事故の弁償など）、そのお金を援助する             |
| 4) 私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする   |
| 5) 私が財布をなくしたり、物を壊した弁償などで急に数千円必要になったとき、そのお金を貸す                             |
| 6) 私が自分にとって重要なこと（例えば教育、進学や就職・転職、長期ローンを組むべきかなど）を決めなくてはならないとき、それについてアドバイスする |
-

表2 記述統計量

変数	高校生・男子		高校生・女子		大学生・男子		大学生・女子		
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
サポートの入手可能性	18.24	4.73	19.46	4.18	20.13	3.15	20.91	2.80	
サポート源	リスト最大値・血縁者	4.15	1.87	4.86	1.19	3.95	1.47	4.50	1.18
	リスト最大値・非血縁者	2.37	1.69	2.73	1.41	3.29	1.48	3.74	1.09
	実質人数・血縁者	3.30	1.68	4.18	1.92	3.66	1.69	4.29	1.62
	実質人数・非血縁者	3.73	2.87	4.79	2.87	5.49	2.83	6.30	2.85
サポート源への満足度	29.24	7.00	31.61	6.37	28.73	6.04	31.61	4.82	
精神的不健康	26.51	5.68	28.16	5.66	26.87	5.17	27.34	5.50	

干表現が異なるがいずれも4つ設けられており、得点が高いほど精神的に不健康であることを表すように数値が割り当てられる。原版ではGHQ方式として4段階の回答にそれぞれ0・0・1・1点を与えることとされているが、本研究では相関分析をおこなうために得点が正規分布しやすくなるよう4段階の回答に1～4点を与え、その合計点を「精神的不健康」の指標とした。Cronbachの $\alpha$ 係数は0.80であった。

### 2.3 実施方法

高校生は、大阪府下の公立A高校において、各クラス担任を通じて配布し、数日後に回収した。大学生は、京都府下の私立B大学において、心理学関連科目の受講者に協力を依頼し、2週間以内に提出させた。実施時期は高校生、大学生ともに6～7月であった。なお、A高校からはB大学に対して毎年複数の受験者および合格者がおり、A高校に対する調査依頼はB大学4年次在学中の同高校出身者を通じておこなわれた。

### 2.4 倫理的配慮

高校ではクラス担任教員と学校長、大学では当該科目担当教員および同教員の所属先の長による承諾を得た後、教室に出向いて調査の趣旨を説明し、調査票を配布した。調査結果は研究目的にのみ使用すること、すべての回答を集団の統計的な傾向として処理すること、個人別の結果は一切公表しないこと、回答しないことによる不利益は一切ないこと等を文書および口頭で説明のうえ、無記名により調査を実施した。なお、調査実施時点においては調査実施者の所属先における倫理審査の組織的体制が整備されていなかったため、当該分野の慣例に従って上記の措置をとった。実施主体等は調査票に明記されていたが、実施後のクレーム等はなかった。

## 3 結果

### 3.1 記述統計量

サポートの入手可能性、サポート源の人数、サポート源との関係に対する満足度、精神的不健康の各指

標について、平均値と標準偏差を表2に示す。

このうち、サポートの入手可能性、満足度、精神的不健康については回答者の群（高校生・大学生）と性別の2要因で、またサポート源の人数については、間柄（血縁・非血縁）を加えた3要因で分散分析をおこなった。その結果、いずれの分析でも性別は有意ないし有意傾向な主効果（すべて男子<女子）を示したが、性別と他要因との交互作用に有意なものは見られなかった。

すなわち、サポートの入手可能性では群と性別の両主効果（それぞれ $F(1,326)=15.91$ と $5.71$ ,  $p<.001$ と $p<.05$ ）、満足度と精神的不健康では性別の主効果（それぞれ $F(1,326)=15.16$ と $3.04$ ,  $p<.001$ と $p<.10$ ）のみが有意ないし有意傾向であり、交互作用は有意ではなかった（ $F(1,326)<1.0$ , n.s.）。サポート源の人数については、リスト最大値の場合、群・性別・間柄の3つの主効果（それぞれ $F(1,326)=150.70$ ,  $8.74$ ,  $19.50$ ,  $p<.001$ ,  $p<.01$ ,  $p<.001$ ）と、群×間柄の交互作用（ $F(1,326)=32.94$ ,  $p<.001$ ）が有意であった。それ以外の交互作用はすべて有意ではなかった（ $F(1,326)<1.1$ , n.s.）。実質人数の場合も同様に、3つの主効果（それぞれ $F(1,326)=54.03$ ,  $21.90$ ,  $17.85$ , いずれも $p<.001$ ）と群×間柄の交互作用が有意であり（ $F(1,326)=17.83$ ,  $p<.001$ ）、それ以外の交互作用はすべて有意ではなかった（ $F(1,326)<1.0$ , n.s.）。

有意であった群×間柄の交互作用に注目すると、リスト最大値の場合は、図1に示すとおり、高校生では血縁者が非血縁者を大きく上回っているのに対して大学生ではその差がまだあるとはいえ縮小しており（ $F(1,326)=165.30$ と $20.94$ , いずれも $p<.001$ ）、これは血縁者についてはわずかな低下にとどまる一方で非血縁者の数値が大幅に上昇している（ $F(1,326)=3.13$ と $37.31$ ,  $p<.10$ と $p<.001$ ）ことから生じていた。実質人数の場合は、図2に示すとおり、高校生では血縁者を非血縁者が僅かに上回る程度であるのに対して大学生ではこの差が非常に大きく（ $F(1,326)=4.96$ と $65.77$ ,  $p<.05$ と $p<.001$ ）、これは血縁

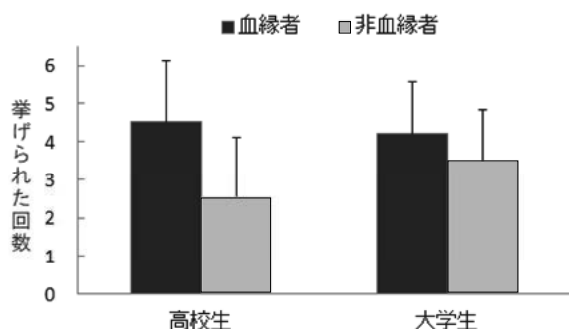


図1 血縁者および非血縁者の「リスト最大値」における大学生と高校生の比較

注：エラーバーは標準偏差を示す。

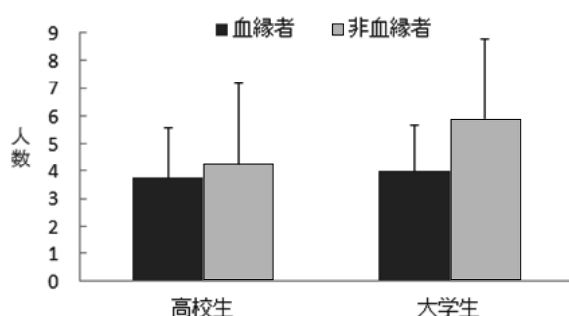


図2 血縁者および非血縁者の「実質人数」における大学生と高校生の比較

注：エラーバーは標準偏差を示す。

者については高校生と大学生で変化がない一方、非血縁者では明らかに大学生の数値が大きくなっている ( $F(1,326)=1.47$ と $26.99$ , n.s. と  $p<.001$ ) ことから生じていた。

### 3.2 サポート源の人数とサポートの入手可能性、満足度の関係

サポート源の人数とサポートの入手可能性、サポート源への満足度との相関係数を、高校生と大学生の別に算出した（先の分析をふまえ、性別と各群

内での学年を統制）。表3の左下に高校生、右上に大学生の結果を示す。サポート源の4指標間の相関は高校生と大学生で類似しており、リスト最大値と実質人数の中での血縁者と非血縁者の相関よりも、同じ間柄でのリスト最大値と実質人数の相関の方が高かった（いずれも符号は正）。リスト最大値の血縁者と実質人数の非血縁者の相関は負であった。また、サポートの入手可能性とサポート源への満足度の相関が正で高いことも、高校生と大学生で同様であった。

これに対して、サポート源の人数に関する指標とサポートの入手可能性およびサポート源への満足度との関係は、高校生と大学生では異なっていた。すなわち、高校生では血縁者の指標のみがサポートの入手可能性と有意に関連しており、サポート源への満足度との関連性については、血縁者と非血縁者ともに有意ではほぼ同等の関連性を示していた。大学生の場合、いずれも有意傾向ないし有意な相関ではあったものの、サポートの入手可能性では血縁者と非血縁者でほぼ同等の関連性があり、サポート源への満足度では明らかに非血縁者の指標の方が強い相関を示していた。

### 3.3 サポート源の人数、入手可能性、満足度と精神的不健康との関連

高校生と大学生のそれぞれについて、精神的不健康とサポート源の人数、入手可能性、満足度との関連性を検討した。表4に、性別および学年を統制した精神的不健康との偏相関係数、および精神的不健康を従属変数とする重回帰分析における標準化偏回帰係数と決定係数を示す。高校生の場合、血縁者の実質人数とサポート源への満足度が精神的不健康を防ぐ方向での関連性を示していた。サポートの入手可能性は関連していなかった。大学生の場合、サポート源への満足度とサポートの入手可能性が精神的不健康と負の関連性を示した。なお、重回帰分析のみ、

表3 サポートの入手可能性、サポート源の人数、満足度の相互関係

	サポートの 入手可能性	リスト最大値 ・血縁者	リスト最大値 ・非血縁者	実質人数 ・血縁者	実質人数 ・非血縁者	サポート源へ の満足度
サポートの入手可能性		.13 +	.22 **	.19 *	.23 **	.45 ***
サポート源	リスト最大値・血縁者	.35 ***	.02	.14 +	-.22 **	.19 *
	リスト最大値・非血縁者	.09	.10	.01	.45 ***	.51 ***
	実質人数・血縁者	.27 ***	.36 ***	.14 *	.17 *	.28 ***
	実質人数・非血縁者	.14 +	-.18 *	.45 ***	.25 ***	.44 ***
サポート源への満足度		.40 ***	.21 **	.19 *	.27 ***	.17 *

左下：高校生，右上：大学生。

性別と学年を統制した偏相関係数。中央の枠内はサポート源の人数に関する指標間の関係を示す。

+ $p<.10$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

表4 精神的不健康との関連性

変数	高校生		大学生	
	偏相関係数	重回帰 $\beta$	偏相関係数	重回帰 $\beta$
サポートの入手可能性	-.07	.05	-.32***	-.22**
サポート源 リスト最大値・血縁者	-.09	-.04	-.06	.06
リスト最大値・非血縁者	.04	.11	.02	.18*
実質人数・血縁者	-.22**	-.19*	-.09	.04
実質人数・非血縁者	-.06	-.05	-.03	.13
サポート源への満足度	-.17*	-.15 <sup>+</sup>	-.35***	-.43***
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001		R <sup>2</sup> =.09*	R <sup>2</sup> =.21***	

リスト最大値における非血縁者の得点が高いほど精神的に不健康であることを意味する関連性が有意であった。なお、重回帰分析の決定係数は大学生の方が大きかった。

#### 4. 考察

本研究の目的は、青年期後期にあたる高校生と大学生のソーシャル・サポートの特徴を、血縁者と非血縁者のサポート・ネットワークに関する構造的指標、およびサポートの入手可能性およびサポート源への満足度に関する指標によって比較検討することであった。

まず、サポートの入手可能性とサポート源への満足度については、前者で高校生よりも大学生の方が高得点であったが、後者では群間の差異は有意でなく、性別による差異が高校生・大学生に共通して認められた。女性の方が男性よりもソーシャル・サポートの得点が高いことは、従来の多くの研究と共通する知見である<sup>19)</sup>。入手可能性の得点が大学生で高いことは、サポートを必要とする状況やそれが得られる状況をより具体的・現実的にイメージできることが考えられる。ただし、これについては項目内容が大学生の生活状況により近いものであったために生じた可能性もある。

血縁者と非血縁者のサポート・ネットワークに関しては、高校生と大学生で明瞭に異なるパターンが認められた。図1及び図2の結果からは、高校生では友人に代表される非血縁者よりも両親に代表される血縁者がその中心であり、入手可能性や満足度との関連でみても、相対的にみて非血縁者よりも血縁者が優勢であると言える。他方、大学生では、血縁者との結びつきが維持されつつ、非血縁者のサポート・ネットワークが拡大し、またより広範な結びつきをもつサポート源が非血縁者の中に現れる様子がうかがえる。これらの結果からは、高校生から大学生にかけて、親とのつながりを引き続き維持しつつ、友

人との関係を拡大・進化させていく青年期後期の様相が改めて確認できると言える。なお、青年期を通じて友人関係はより互恵的な方向へ、また特定の親友との親密な関係の形成へと変化していくことが指摘されている<sup>20)</sup>。本研究における非血縁者に関する指標には、このことが反映されていると考えられる。

サポート源との関係に関する構造的指標とサポートの入手可能性およびサポート源への満足度との関係（表3）からは、高校生にとって実際にサポートを得ることに対する血縁者の重要性和、大学生にとってはそれが非血縁者にとって代わられることが示されている。このことは、先に述べた構造的な変化とも符合する。ただし、それでもなお、両親に代表される血縁者との関係が重要性を失っているわけではない点は注目に値する。青年期の友人関係に関する研究によれば、青年期には両親との深いアタッチメントが破壊され、それに友人関係が取って代わられるとの指摘もある<sup>21)</sup>。しかし、本研究の結果からは、少なくともソーシャル・サポートに関しては、心理的離乳に関する研究<sup>22)</sup>で述べられているように、青年期後期の親と青年との関係は「対等な」方向に向かっていくという指摘の方が妥当であるように思われる。なお、高校生でも大学生でも、血縁者のリスト最大値と非血縁者の実質人数の間に弱いながらも有意な負の関係が見出された。これは、家族の誰かに全面的に頼っている人では友人関係の拡がりや乏しくなりがちである、という現象を表しているように思われる。

精神的な不健康との関連は主にサポート源への満足度について見出された。これは Sarason et al.<sup>16)</sup> やそれに類する測度を用いた先行研究と同様の知見である。また、大学生ではサポートの入手可能性も精神的な不健康を防ぐ方向での有意な関連性が認められ、高校生よりもサポートと精神的な不健康の関連性が強い傾向がみられた。この点については、入手可能性の得点自体が高校生より大学生の方が高いこと

と同様の背景があるように思われる。ただし、高校生では血縁者の実質人数が多いほど精神的に不健康ではない、という大学生ではみられない関連性が有意であった。血縁者の実質人数が多いということは、同性のみならず異性の親、きょうだい、祖父母などがサポート源に挙げられていたということである。このように、自分を守ってくれる血縁者の存在は、まだ非血縁者への関係の拡がりがない高校生の場合に、特に重要なものであることが伺える。

本研究では、構造的指標と機能的指標の両者を用いて、高校生と大学生におけるソーシャル・サポートの特徴を検討した。本研究の結果からは、ソーシャル・サポートの観点では、青年期後期において友人に代表される非血縁者との関係が拡大した重要性を増していくが、両親に代表される血縁者との関係も維持されると結論づけられる。

ただし、本研究の結果は、ソーシャル・サポートの測定に用いた項目の内容によって規定されている部分があると考えられる。一定の測定内容に従って結論が導かれること自体は何ら不思議なことではないが、特にソーシャル・サポートの場合には、それぞれの研究で少しずつ異なる測定項目が用いられて

いるという問題がある。たとえば嶋田<sup>10)</sup>が依拠するソーシャル・サポートの測定項目は久田ら<sup>23)</sup>の大学生用の尺度を元にしてしているが、この原版の尺度は1次元性が高く主に情緒的サポートを測定しているとされている。これに対して本研究の測定項目は、情緒的な内容だけでなく道具的な内容も含み、かつ少なくとも表面的な行動レベルではそれらを区別しうることが確かめられている<sup>15)</sup>。本研究の結果を一般化しようとする場合には、小規模な横断的研究であるというごく基本的な方法論的限界以外に、特にこの測定項目による影響を考慮しておかなくてはならない。

## 謝 辞

本稿は、関西心理学会第109回大会での発表データを全面的に再検討し、新たな観点を加味してまとめ直したものである。同発表に際してご指導くださいました橋本宰先生（同志社大学教授；当時）およびデータ収集に協力してくれた中島秀徳さんに深く感謝いたします。また、調査の実施に際してご協力くださった高校・大学の先生方、多くの回答者の皆様にも厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) 久田満：ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題。看護研究, 20(2), 2-11, 1987.
- 2) 大塚泰正：ソーシャルサポート。下山晴彦編集代表, 誠信心理学辞典, 新版, 誠信書房, 東京, 588, 2014.
- 3) 相馬敏彦：ソーシャルサポート。下山晴彦編集代表, 誠信心理学辞典, 新版, 誠信書房, 東京, 266, 2014.
- 4) Caplan G: *Support systems and community mental health: Lectures on concept development*. Behavioral Publications, New York, 1974.
- 5) 高橋恵子：人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達—。東京大学出版会, 東京, 2010.
- 6) Erikson EH: *Identity and the life cycle: Selected papers*. International Universities Press, New York, 1959.
- 7) 白井利明：青年期はいつか。白井利明編, よくわかる青年心理学, ミネルヴァ書房, 京都, 4-5, 2006.
- 8) 二宮克美：家族関係と青年。久世敏雄編著, 青年心理学—その多様な発達の軌跡, 放送大学教育振興会, 東京, 60-73, 1996.
- 9) 久世敏雄, 大野久, 平石賢二, 長峰伸治：青年理論の矛盾と解決のためのミニ・モデルの提案—アイデンティティ形成と親子関係の視点から—。松田財団研究報告書, 8, 37-45, 1995.
- 10) 嶋田洋徳：知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達の变化に関する基礎的研究。広島大学総合科学部紀要 IV 理系編, 22, 115-128, 1996.
- 11) 尾見康博：子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究。教育心理学研究, 47(1), 40-48, 1999.
- 12) 福岡欣治：ソーシャル・サポート研究の基礎と応用—よりよい対人関係を求めて—。谷口弘一, 福岡欣治編著, 対人関係と適応の心理学—ストレス対処の理論と実践—, 北大路書房, 京都, 97-115, 2006.
- 13) 福岡欣治, 橋本宰：ソーシャル・サポート・ネットワークの「広さ」と「深さ」からの指標化の試み—大学生と中年成人を対象として—。同志社心理, 44, 6-23, 1997.
- 14) 福岡欣治, 橋本宰：大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係。教育心理学研究, 43(2), 185-193, 1995.
- 15) 福岡欣治：ソーシャル・サポート内容およびサポート源の分類について。日本心理学会第64回大会発表論文集, 144, 2000.
- 16) Sarason IG, Levine HM, Basham RB and Sarason BR: Assessing social support: The Social Support

- Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 127-139, 1983.
- 17) 松崎学, 田中宏二, 古城和敬: ソーシャル・サポートの供与がストレス緩和と課題遂行に及ぼす効果. 実験社会心理学研究, 30(2), 147-153, 1990.
  - 18) 中川泰彬, 大坊郁夫: 日本版 GHQ 精神健康調査票手引. 日本文化科学社, 東京, 1985.
  - 19) 橋本剛: 対人関係に支えられる. 和田実編著, 男と女の対人心理学, 北大路書房, 東京, 137-158, 2005.
  - 20) 落合良行, 佐藤有耕: 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44(1), 55-65, 1996.
  - 21) 遠藤公久: 交友関係. 加藤隆勝, 高木秀明編, 青年心理学概論, 誠信書房, 東京, 110-123, 1997.
  - 22) 落合良行, 佐藤有耕: 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44(1), 11-22, 1996.
  - 23) 久田満, 千田茂博, 箕口雅博: 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1). 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144, 1989.

(平成28年5月12日受理)

## Comparison of Social Support of High School and University Students: Inspection of Its Developmental Changes

Yoshiharu FUKUOKA

(Accepted May 12, 2016)

**Key words :** social support, high school students, university students, developmental changes, adolescence

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.26, No.1, 2016 97 – 104)